

2019年全日本カート選手権 OK部門 第5・6戦 2019年全日本カート選手権 FS-125部門/FP-3部門 東地域第3戦  
2019年ジュニアカート選手権 FP-Jr部門/FP-Jr Cadets部門 東地域第3戦 [JAF公認No.2019-1807]

開催日：2019年7月6～7日 開催場所：茂原ツインサーキット東コース 格式：国内/準国内 主催：MTC [団体登録No.公認81202]

フォト/関根健司、JAFスポーツ編集部 レポート/水谷一夫

昨年FS-125部門で5位の成績を残した高木悠帆選手。茂原で見事にチャンスをモノにした。



## ルーキーの高木悠帆選手がOK部門第5戦で念願の初勝利!

レースウィークの金曜日、あるドライバーは半ばあきれ顔でこう語った。「茂原がこんな天気になるなんて……、どのタイヤメーカーも予想しなかっただろうね」。

OK部門の真夏の戦いとしてお馴染みの茂原大会は、例年、酷暑との戦いとなるレースだ。それが今年は気温が20度近辺に留まり、加えてサーキットには雨と強い風が。参加者もギャラリーも上着を手放せない、季節外れの寒さに見舞われたのだ。

そんな中で行われた第5戦を制したのは、17歳のルーキー・高木悠帆選手だった。決勝のスタートで3番グリッドから2番手に上がった高木選手は、単独走行で着々とラップを消化して

1 2019年「オートスポーツ」全日本カート選手権 OK部門第5戦・第6戦



2



3



OK部門第5戦/1.第5戦入賞の皆さん。2.フロントローからスタートの朝日ターボ選手は冷静な走りで2位入賞。3.プリチストーンタイヤを履く高橋悠之選手が3位と大健闘。

いく。すると28周レースの17周目、トップ独走中の皆木駿輔選手がリアホイール脱落のため最終コーナーでクラッシュ。ラップリーダーの座が高木選手に回ってきた。

ところどころに雨水による川も出現した危険なコースながら、後続とのギャップを広げながら力走を続ける高木選手。そしてチェッカーの瞬間、高木選手は指でナンバー1サインを掲げ

ると、何度も拳を握りしめた。

「(予選後の)タイヤは皆木君の方が残っていて、抜ける自信はなかったけれど、勝てて良かった。言葉にならないくらい嬉しいです」。ここまでの4戦では目立った結果を残せず、ノーポイントに終わっていた高木選手。ビッグチャンスをさっぱりモノにして、感謝の初勝利を掴み取った。



7 2019年「オートスポーツ」全日本カート選手権 OK部門第6戦・第6戦



OK部門第6戦/4.本庄に続き好調な皆木駿輔選手が優勝。5.一時はトップに立った朝日選手だが2位。6.3位入賞を果たした高木選手。7.第6戦入賞の皆さん。

8 9年 オートバイ全日本カート  
OK部門第1戦・第6戦



FS-125部門 / 8.入賞の皆さん。9.単独走行でフィニッシュの野村勇斗選手は2戦連続の2位獲得、ランキングも2番手に浮上。10.岩崎有矢斗選手が3番手走り切って自己最上位を大きく更新し、初表彰台に立った。11.「やっと全日本に慣れてセッティングも分かってきた」という16歳のルーキー・星涼樹選手が、全セッションで一度もトップの座を譲らぬパーフェクトゲームを演じて初優勝。同時に東地域のポイントリーダーとなった。



FP-3部門 / 12.開幕戦では熾烈な優勝争いの末に2位、第2戦では3番手ゴールも車検失格と、悔しいレースが続いていた山本祐輝選手が、初体験の茂原で予選も決勝もポールから独走して待望の初優勝。13.3番グリッドからスタートで1ポジションダウンの川福健太選手が、2台を抜いて今季最上位の2位を獲得。14.第2戦から参戦の半田昌宗選手が、3位フィニッシュで初表彰台に。15.入賞の皆さん。



FP-Jr部門 / 16.入賞の皆さん。17.中団では大集団のバトルが繰り返される中、9番グリッドから順位を上げたOSAMUS選手が2位を獲得。18.村田悠磨選手が8台抜きで3位フィニッシュを果たし、初表彰台に立った。19.2018年のFP-Jr Cadets王者の五十嵐文太郎選手が、予選で6台を抜いてポールを獲得と、決勝では序盤から後続を引き離し、独り舞台で初優勝を飾った。



FP-Jr Cadets部門 / 20.ドライコンディションのタイムトライアルで9台中8番手に留まった春日龍之介選手が、ウェットに替わった予選で2位に躍進。決勝では独走を続けて初優勝を飾った。21.4台が一丸となったセカンドグループでは、鈴木恵武選手が6番グリッドからの追い上げで2位に入賞。22.第2戦のウィナー・菊池貴博選手が8番グリッドから3位表彰台を掴み取った。23.入賞の皆さん。

3つのタイヤメーカーが開発競争を繰り返すOK部門で、今回のウェットレースの主導権を取ったのは高木選手も履いたダンロップだった。そして2位には、やはりダンロップ・ユーザーの朝日ターボ選手。一方、ブリヂストン・ユーザーでは高橋悠之選手が大健闘の3位入賞を遂げ、DL勢の表彰台独占を阻んだ。

続く第6戦のウィナーはOK部門2年目、18歳の皆木選手だった。第4戦の本場で初優勝を飾って一躍注目の的となった皆木選手は、第6戦決勝のスタートでポールから2番手に後退したが、トップに立った朝日選手を焦らず追うと、一発で逆転に成功して残る周回を独走。第5戦のアクシデントの影響を微塵も感じさせない走りでも2勝目を果たした。

「走行ラインは(朝日選手より)自分の方が掴めていると感じていました。トップに出てから

は、バトルになると大変なので、後ろを引き離すことに専念しました」と皆木選手。

朝日選手は中盤以降のペースダウンの問題を抱えながら、冷静な走りでもたもた2位を獲得。高木選手は序盤で順位を落とすも、ファステストラップをマークしながらの挽回で3位に。4位の井本大雅選手の後には新原光太郎選手、堀尾風允選手とフレッシュな顔ぶれが続き、結果はDL勢の1～6位独占となった。

ただし、第6戦の表彰台に立った3名の活躍は、DL製ウェットタイヤの恩恵だけによるものではなかった。土曜日の雨上がりの午後、ほぼ全面が乾いたコースで全車スリックタイヤを履いたタイムトライアルでも、皆木選手が総合トップ、高木選手と朝日選手がAグループで2位・3位になっている。彼らはウェットでもドライでも速かったのだ。

これでOK部門の2019シーズンは、全10戦中6戦が終了。ポイントリーダーとして茂原を迎えた佐々木大樹選手は、タイムトライアルで不利なグループに入ったことで総合17番手に留まり、6位と12位で苦しいレースを終えた。それでも138点までポイントを積み上げ、ランキング首位の座をキープしている。ランキング2番手には126点の皆木選手が、同3番手には120点の高橋選手が浮上してきた。佐々木選手の独走状態だったポイントレースは一転、2番手以降が急接近したことによって混迷の様相を見せ始めた。

次の第7戦/第8戦SUGO大会は約3ヵ月先。この長いブランクの間に、各タイヤメーカーの開発の進展次第で戦況がガラリと変わる可能性もある。チャンピオン争いの行方は、未だ不透明なままだ。